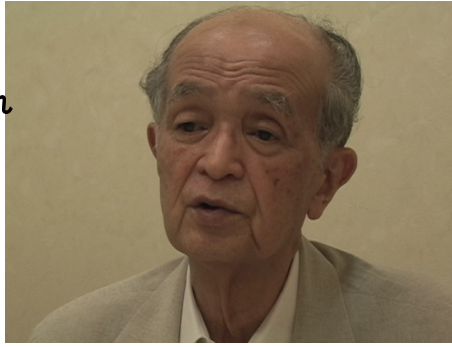


松浦喜一さん

1923(大正12)年11月28日生まれ
当時の本籍地 長崎県
陸軍 航空兵(操縦・戦闘機)
陸軍特別操縦見習士官(2期生)
第144振武隊
日本・鹿児島



●1943(昭和18)年12月1日 慶応大学予科3年生在学中に学徒出陣、特別操縦見習士官2期生に

●1945(昭和20)年2月 特攻の希望調査

これから君たちは爆弾を抱いて、敵艦に突っ込む特攻隊になるんだ、そういう作戦をやるけれども、君たちはそれを希望するかどうか希望の有無を書けと、それには「熱望」と「希望」と「希望せず」と三種類あるんですね。「希望」って言うのは当時の日本人は皆ね、日本が負けそうなんだから、体当たりでも何でも辞さないぞ、という気持ちでいたって言うことはね飛行機乗りだけじゃないんですよ、日本国民が皆そういう気持ちだったんですね。だから、当然もう早かれ遅かれ自分は突っ込むぞと、そういう人は「希望」と書いたわけですね。

「希望せず」を書いた人はね、本人からは絶対に聞かないですけど、飛行機の訓練から外されちゃうわけですよ。それと他所の飛行場に行けと言われてた人、「希望せずと書いた人だな」と思いましたね。100人中10人位ですかね。

●1945(昭和20)年5月 第144振武隊に配属、6月3日か4日 万世(ばんせい)飛行場(鹿児島県)に

●1945(昭和20)年6月8日 出撃命令を受けるがエンジン故障で出撃せず

2機は出発できず、別の2機も離陸直後にエンジン不調で引き返す。2機だけが出撃、沖縄洋上で戦死。

●1945(昭和20)年6月19日 4機に出撃命令

離陸してしばらくすると、1機がね故障になってね、引返したんですよ。ですから3機で飛んだんですね。

非常に出発する時は天気が良かったんですけど、30分もすると嵐になりましてね、もう豪雨ですよ。それで沖縄まで2時間半かかるんですがね、2時間半かかるうちの2時間飛んだ時に、もうあと30分飛ばせば沖縄っていう所に来た時に、1機がね、海面に墜落しちゃったんですよ。

それで隊長はね、もうこの悪天候じゃあとても沖縄まで行くことは出来ないと、そう決心したんですよ。引返しちゃったんですよ。私も付いて引き返したんですがね。

●私が本当にお話したいことはね、よく戦後ね、俺は特攻隊員だったんだぞと言う人がいますね。それは何千人といらんですよ。だけどね、何千人もいる中で実際に特攻基地にまで行って生き残ったっていう人はね、おそらく数十人しかいないんです。皆特攻基地まで行かないうちに終戦になってしまったんですよ。

だからね、特攻隊ということをして口にする人と、特攻隊で戦死した人、生き残った人、これは全然違うんですよ。はっきりと線の両側に分かれるわけですよ。それで特攻隊で生き残った人が、どんなふうに特攻隊で死んだ人のことを考えてもね、絶対に特攻隊で死んだ人の気持ちを理解することは出来ないわけですよ。

特攻隊で死んだ人を慰霊する気持ちは皆持っていますよ。だけど、どんなに特攻隊で亡くなった人に頭を下げて、特攻死した人は最後にどういう気持ちで敵艦に突っ込んだんだろうか、それは絶対に判らないことなんですよ。

ただね、私は、あと30分の所まで行ったわけですね。あと30分までの所まで行って、引き返して生き延びたと。これはね、私には責任があると思うわけですね。私は特攻隊で戦死した人のね、気持ちをね、どうしても探求しなくてはならない。不可能なことであっても、これが私に与えられた任務だろうと、そう思ったんですよ。

●確かに戦争中の日本人は皆天皇陛下の臣民なんですよ。天皇陛下を守るために死ぬんですよ。だけど果たして、帝国軍人であり続けたのか？

特攻隊の場合は、飛行場を飛び立って、2時間半で戦死するわけですよ。2時間半という間は健康なんです。飛び立つときは帝国軍人なんです。その間も帝国軍人なんです。だけど、最後の瞬間は帝国軍人であり続けたのか？

餓死の場合、1月も2月も飢えに苦しんでいる。そのときは帝国軍人ですよ。死ぬまであと2時間になったときに、完全に食べ物がないときに、果たして最後まで帝国軍人であったのだろうか、ということなんです。

私はだから、その結論を、帝国軍人では、なくなっている、つまり帝国軍人というものに対する怒りを持って死んだんだと思うんですよ。天皇のためとか、大日本帝国のためとか、そういう帝国軍人はそこで消滅するんだと。要するに最後は怒りを持って死んだんだと思うんですよ。

(取材日 2006年9月2日)